

関宿城博物館周辺の植生について (2)

岩槻 秀明

(1) はじめに

前号の研究報告では、関宿城博物館周辺の植生について総論的に記述した。本稿では、関宿城博物館から徒歩によって行くことができる、利根川と江戸川の分流点付近の河川敷の植生について、現時点で調査できている範囲でまとめておこうと思う。

なお、前号では、エリアごとに分けて、細かく植生について紹介したが、今回は、自生地保護の観点から、河川敷内のエリア分けは行わず、全体を見た概要と、確認できた種のリストアップ及び写真での紹介にとどめておきたいと思う。

(2) 調査日・方法

2007年～2008年にかけては、以下の日に調査を実施した。

- (1) 2007年 5月12日
- (2) 2007年 7月 7日
- (3) 2007年10月21日
- (4) 2008年 1月19日
- (5) 2008年 3月 2日
- (6) 2008年 3月25日
- (7) 2008年 4月12日
- (8) 2008年 5月25日
- (9) 2008年 7月11日
- (10) 2008年 9月14日
- (11) 2008年10月13日

調査は、河川敷内を歩き、写真による記録を実施し、後に、撮影した種をリストア

ップした。基本的には目に付くものになるべく多く記録していったが、どこにでも見られるような汎用種については記録を省略したものもある。

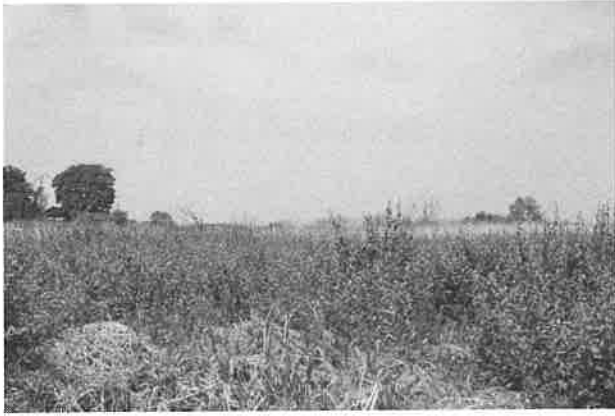
(3) 調査地の環境



【図1】ヨシ・オギの優占群落

調査箇所の河川敷は、図1のように、多くがヨシ・オギの優占する群落となっている。ヨシ・オギ原の縁では、ガガイモ、ツルマメ、カナムグラ等のマント群落となっている。その外側、河川敷内の道路沿いに、ソデ群落として、メドハギやカンエンガヤツリ等河川敷固有種その他、多様な草本が見られた。

また、江戸川高水路～中之島公園にかけての一部では、クコの群落も見られる他、オオブタクサやヨモギ、セイタカアワダチソウも一部で群落を作っていた。



【図2】クコの優占する低木群落

また、河川敷内には図3のような裸地も存在する。増水と乾燥を繰り返したいわゆる「減水裸地」で、冬季は顕著なひび割れが生じる。



【図3】減水裸地の表土の様子

この場所には、コバナキジムシロ、タチタネツケバナ、オヘビイチゴ、ノチドメ、カワヂシャ等がまばらに生えているのを確認した。



【図4】減水裸地内のコバナキジムシロ

なお、コバナキジムシロは、関宿城博物館周辺の河川敷～野田市内の利根川・江戸川河川敷では比較的普通に見られるが全国的にみると稀な外来種である。

(4) 植生の特徴－外来植物

関宿城博物館付近の河川敷で非常に目立つのが、5月頃のハルシャギクの群落である。



【図5】ハルシャギク

場所によっては、ソデ群落をハルシャギクが完全に覆いつくしてしまい、ソデ群落として出現していた河川敷固有種を圧迫している可能性がある。

また、かつては珍しい存在だったナヨクサフジが、ここに来て目に付くようになった。さらに、2008年5月17日には、ナヨクサフジの白花種の撮影もしている。

その他、アレチヌスビトハギ、マツバゼリ、ムシトリマンテマ、メリケンガヤツリ、キキョウソウ、ヒメクマツヅラ等外来植物も目立つ。



【図6】 ナヨクサフジ



【図7】 マツバゼリ



【図8】 アレチヌスビトハギ

外来生物法関連種の動向にもふれておく。
2005年10月1日に制定された外来生物法で法的規制のかかる特定外来生物のアレチウリが江戸川高水路内の一部で猛威を振るっている。その他、同じく特定外来生物のオオカワヂシャも、2007年頃から目立つようになった。確認している特定外来生物は 2008年現在、この2種類のみである。



【図9】 オオカワヂシャ

要注意外来生物としては、アメリカネナシカズラが所々に発生している。主にアカツメクサをターゲットとしている模様だが、あまり勢いはない。同じく要注意外来生物に指定されているイタチハギも散発的に見られるが、こちらも、それほど勢いはない。

以下に、特定外来生物及び、要注意外来生物に指定されているものとして、2008年までに確認している種を一覧にする。

関宿城博物館周辺河川敷の特定外来生物

- (1) アレチウリ
- (2) オオカワヂシャ

(以上2種)

関宿城周辺河川敷の要注意外来生物

- (1) オオブタクサ
- (2) ハルジオン
- (3) メマツヨイグサ
- (4) ヘラオオバコ
- (5) ヒメムカシヨモギ
- (6) イタチハギ
- (7) 外来タンポポ种群
- (8) エゾノギシギシ
- (9) コマツヨイグサ
- (10) アメリカネナシカズラ
- (11) シナダレスズメガヤ
- (12) ホソムギ
- (13) ネズミムギ
- (14) ヒメジョオン
- (15) ハルザキヤマガラシ
- (16) ワルナスビ
- (17) ブタクサ
- (18) メリケンガヤツリ
- (19) オニウシノケグサ
- (20) キシュウスズメノヒエ
- (21) セイタカアワダチソウ
- (22) キショウブ
- (23) オオアレチノギク
- (24) カモガヤ
- (25) アメリカセンダングサ

(以上25種)



【図10】イタチハギ



【図11】キシュウスズメノヒエ



【図12】ハルザキヤマガラシ



【図13】メリケンガヤツリ

(5) 植生の特徴－在来種

関宿城博物館周辺では、外来種だけではなく、在来種も多数生育している。在来種で優占種となっているのが先に述べた通りオギとヨシである。また、場所によっては、メドハギやクコ、ヨモギが優占している箇所もあるが、オギ、ヨシほどではない。

オギやヨシを覆うように、マント群落として、ツル性の植物が見られる。河川敷内でよく見られるのが、ヘクソカズラ、ガガイモ、ツルマメ、カナムグラ、イシミカワである。江戸川高水路などでは、カナムグラが優勢で、オギやヨシがカナムグラによって覆いかぶされ、倒されているような箇所も見受けられる。ヤブガラシも見られるが、あまり勢いはない。

オギ・ヨシ原の縁、河川敷の道路沿いには、ソデ群落として多種多様な草本が見られる。よく河川敷や荒地に生育する種も多く、ミゾコウジュ、コイヌガラシ、メドハギ、タカアザミ、カワラニンジン、メハジキ、ホソバイヌタデ、オオイヌタデ、サナエタデ、クサネム、クマツヅラ、ヤブジラミ、ナギナタコウジュ、ハナイバナ、スカシタゴボウ、カンエンガヤツリ、アオガヤツリ、クグガヤツリ、ヌマガヤツリ、チカラシバ、ミコシガヤ、オヘビイチゴ、カワヂシャ等を確認している。これらは、減水裸地となっているような箇所にも見られる。

水溜りができやすく、常時ぬかるんだ場所では、タコノアシ、ヌマガヤツリ、コギシギシ、ヤガミスゲ、アゼナルコ、ミゾソバ、ムラサキサギゴケ等の湿生植物も見られる。

また単発の発生的なものとして、ノカラムツ、カワラサイコ、ノニガナ、ハナニガナ、タケニグサ、フジバカマ等を確認している。

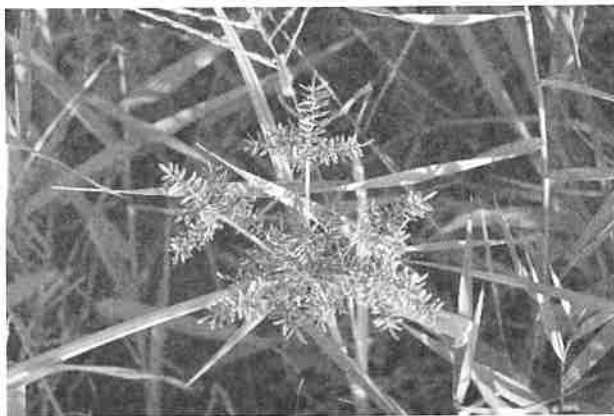
その他、海岸植物であるコウボウシバやアキノミチヤナギも時々発生しているが、一時的なことが多く定着はしないようである。



【図14】タカアザミ



【図16】ミゾコウジュ



【図15】カンエンガヤツリ



【図17】ミコシガヤ



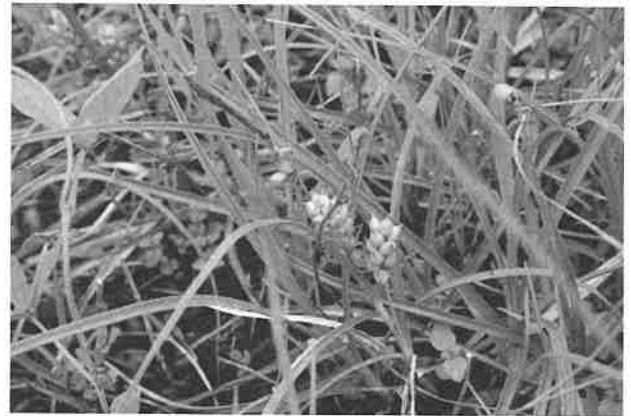
【図18】クマツヅラ



【図21】コイヌガラシ



【図19】クグガヤツリ



【図22】コウボウシバ



【図20】イシミカワ

(6) 今後の展望と課題

今回は、標本でなく、写真撮影による記録を行った。しかし、学術的に記録として残すためには、さく葉標本での記録が必要になる。今後は、標本作成も視野に置いた調査をしていきたい。

また、利根川・江戸川分岐点付近の河川敷で、千葉県側だけの調査となっているが、おいおい領域を拡大して、茨城県境町側の河川敷（境河岸付近）や、中之島公園、茨城県五霞町側の河川敷における植生調査も行なっていきたい。

(いわつき・ひであき 当館展示協力員)